

高姫西 SSH 通信

vol.7 2026.3

「読書のすゝめ」

SSH 推進部長（国際理学科長） 熊谷 洋介

年度末が近づくと、SSH 推進部の先生をはじめ、色んな先生方が力を合わせて「研究開発実施報告書」というものを作ります。文部科学省に提出するための、いわばこの一年を振り返る大切な記録です。国の指定を受けて税金を使わせてもらっている以上、私たちはみなさんの学びの変化を丁寧に分析し、成果や来年度への課題をきちんとまとめなければなりません。アンケート回収に執念を見せているのも、そんな背景があるからです。

ありがたいことに、日頃のみなさんの取り組みのおかげで、さまざまな非認知能力の向上が数字として見えてきています。そのあたりは近いうちに本校のホームページにも載るはずなので、興味があれば覗いてみてください。ただ、気になる点もあります。たとえば「自分の知らないことや興味があることについて、文献や書籍を使って調べますか？」という質問に対して、「とてもそう思う」と答えた割合が、1年生で17%、2年生で22%、3年生でも24%と、思いのほか低いのです。

もちろん、今は情報社会です。検索ボックスに数文字打ち込めば、ほとんどの疑問は数秒で片づいてしまいます。でも、そこで得た情報が本当に信頼に足るのか、どんな背景や文脈に支えられているのか——そういったものは、やはり本を開いて初めて見えてくるものが少なくありません。

本を読むというのは、ただ知識を手に入れるだけの行為ではないように思います。ページをめくるリズムに合わせて、思考の筋道が整っていきなり、静かな集中の時間が育っていきなりする。そういう、目に見えない芯のような力が、少しずつ身についていくのだと思います。速さがものをいう世界のなかで、読むことだけがもつ価値は、案外まだ大きいと感じます。

正直に言えば、最近の私はあまり本を読めていません。山ほど書類は読むのですが、買ったまま折り目のついていないまっさらの本が、棚の一角に静かに並んでいます。高校時代は電車通学だったので、行き帰りの揺れの中でよく本を読みました。中でも夏目漱石の『こころ』を読んだとき、読書の面白さに初めて深く気づいたように思います。今も昔も教科書に載っていますが、上中下の三部構成の一部しかありません。それでも話の筋自体は分かるのですが、全体を読むと作品の響き方がまるで違いました。「千円札になるだけのことはあるな」と妙に納得したのを覚えています。

探究活動に何でも結びつけるのはどうかとも思うのですが、みなさんが取り組んでいるテーマも、関係する本に触れることで視野が広がり、深まり方も変わってくるはず。インターネットや生成 AI の便利さは否定しません。ただ、本が与えてくれるものは、いつの時代でも変わらないのだと思います。

探究活動

SSH 成果発表会 : 令和 8 年 1 月 31 日(土)

1月31日(土)にSSH成果発表会が行われました。今年は本校で開催され、学校全体を使って行われたこの発表会は、各教室で様々な取り組みを行いました。西高生徒が力を合わせて会場準備や発表をやり切りました。発表会では最初に体育館に集まり「科学的に考える力～探究からAI時代の未来を拓く」という演題で、講師の渡辺 美智子教授による基調講演を聴講しました。講演の後は各々自由に行動し、見学の生徒は目当ての会場を回りました。各教室では本校生徒によるポスター発表のほかに、外部から45名もの中高生が本発表会に参加しポスター発表を行いました。そのほかには大阪大学やダイセルの方々にお越しいただいて行われた事前予約制のSSH連携ブース、国際理学科の生徒によるスライド発表が行われ、大講義室では本校代表生徒によるスライド発表が行われました。また、高校や大学、企業から約80名の方が本発表会にご参加くださり、各会場を見学して、生徒の発表に対して質問や助言を多くいただきました。

発表会の後は希望生徒が集まって生徒交流会を行い、交流を深めました。本発表会は課題研究の集大成であり、生徒にとって学びの多いものになったと思います。

